

2019年 か ぜ ひ か

風光れ

人権のたより 第18号 11月15日発行

三重県立津東高等学校



今月は中村久子さんを紹介いたします。

中村久子さん（1897年11月25日 - 1968年3月19日）は、明治～昭和期の興行芸人、作家。両手・両足の切断というハンデにも関わらず自立した生活を送った女性として知られています。

中村久子は、まだ幼い3歳の時に、霜焼けから「突発性脱疽^{だっそ}」にかかり、両手と両足を切断してしまいました。足が落とされ・手が切り落とされたのです。久子は、肉が焼け骨が腐り泣き叫びました。母は、雪の中を神社で「お百度参り」して祈りました・「命だけでも助けてください」・と。不幸は続いて、久子が7歳の時に、父を亡くしました。母は、子供をつれて川の激流にのみ込まれ死を覚悟しますが、久子の泣き声でわれに返り、とぼとぼと我が家に帰ります。10歳にして弟と生き別れる悲しみにも耐えました。

母の再婚で苦勞の連続でしたが、母はあえて一人で生きて行けるようにと、厳しく久子に接したのです。誰の手も借りずに生きていさせるために、母は、心を鬼にしたのです。母は、久子の食事も、トイレも風呂も身の回りの一切を、手のない足のない久子に、自分一人で何もかもさせました。また、裁縫や編み物も口で針をくわえさせてさせました。久子は泣きながらもついに炊事も洗濯もするようになったのです。

20歳になると、両手足がない「だるま娘」として見世物小屋に出され、みんなから笑われました。日本や台湾・朝鮮・満州にと興行のために連れ回され渡り歩いたのです。興行主の中には、手もない足もない久子に過酷な出番を設けて満足な食事も与えず金だけを騙し取られました。

それでも耐えて、耐えて、子供を産みました。おしめを口で交換したり、赤ちゃんのおしっこも、うんちも口で拭いたのです。ミルクを口移しでやって子供を育てました。そして、47歳に、見世物芸人から別れを告げました。72歳で亡くなりました。昭和12年4月、日本にヘレンケラーが訪れた時に、久子に会いました。ヘレンケラーは涙を流しながら・久子に言いました。

「私よりも不幸な人、そして偉大な人」と

<中村久子の歌>

手足なき 身にしあれども 生かされる 今の命は尊かりけり

久子さんは力強く、「この世に絶望は無い」と言います。

本校卒業生の前川楓さんが出場したパラ陸上の世界選手権第6日は12日、アラブ首長国連邦(UAE)のドバイで行われ、女子走り幅跳び(義足T63)で、4メートル13で4位となり、21歳の前川さんは東京パラリンピック代表に内定しました。前川さんは2大会連続の代表入りです。さあ・皆さんも心から応援しましょう!